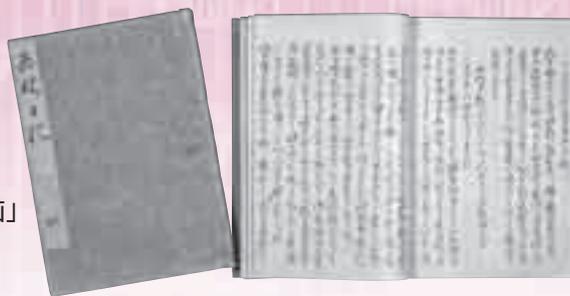
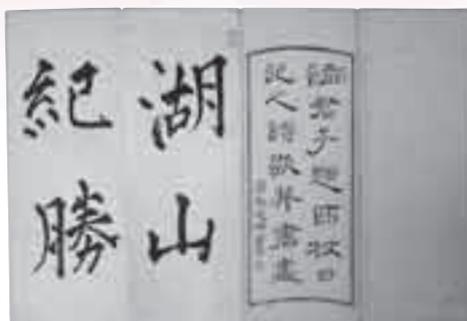
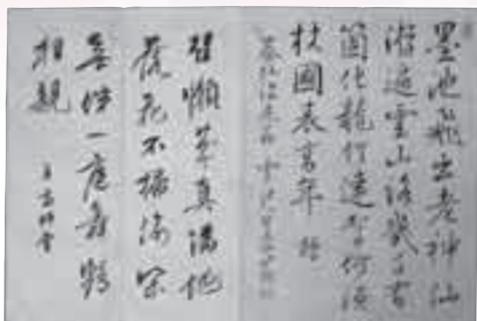


## 「西杖日記」と

## 「諸君子題西杖日記之詩歌並書画」



- ①右 「西杖日記」  
 ②下 「諸君子題西杖日記之詩歌並書画」  
 右から沼尻墨僊書、亀田綾瀬書、  
 関 雪江書、五十嵐愛山書



沼尻墨僊(1775~1856)は弘化2(1845)年、伊勢神宮(三重県)や金比羅宮(香川県)をまわる3か月の旅をしました。中城町不動院(現中央一丁目)の側で塾を開いていた墨僊はこのとき71歳。土浦に戻る途すく旅の記録を「西杖日記(写真①)」として二冊にまとめました。通常の道中記(小遣帳)とは異なり、「西杖日記」には宿賃や飲食代など経費の記録はありません。代わりに墨僊が見たものやその感想、出会った人々との交流が雅文で書き留められています。旅の感動は和歌や漢詩となつて表現されていて、「西杖日記」は「奥の細道」などと同様、紀行文学といえる作品です。

この本は、刊行こそされませんでした。貸し出され、多くの人が読みました。旅行に関する本は今も人気があります。お伊勢参りは一生に一度と言われた時代、他郷の風物を書き留めた風雅な紀行文は魅力的な読み物であったことでしょう。

読者はめいめいに感想を書いて墨僊に返しました。それが「諸君子題西杖日記之詩歌並書画(写真②)」です。「立派なかたがたが西杖日記に寄せてくださった詩歌と書画」という意味です。神龍寺の住職如蓮、江戸の漢詩人亀田綾瀬や大沼枕山、藤田東湖(水戸藩士)、藤森弘庵(土浦藩士)など28人が詩歌や書画を寄せました。いずれも、高齢にもかかわらず旅を続けた墨僊をたたえた内容です。中にひとときわ目を引く流麗な書があります。

墨池飛出老神仙 墨池飛出老神仙  
 遊遍雲山路幾千 遍く雲山に遊ぶ路幾千  
 有箇化龍俱遠駕 化龍の俱に遠駕する有り  
 何須杖國表高年 何んぞ須杖國の高年を表すと  
 (下段は読み下し)

「墨池」とは硯の墨汁をためる部分を指しますが、ここでは学問の場の比喩となっています。「学び舎から離れた仙人(墨僊)は化竜(竜)になるという竹の杖のこと」と旅したのだろう、杖国(70歳のこと)が年寄りだとはとてもいえない。この漢詩を詠んだ関雪江(1827~77)は土浦藩士で、通称を鉄蔵、名は思敬、雪江は号です。関家は代々土浦藩において祐筆(書記)や儒者(政治や道徳を教える)をつとめ、書に堪能な家として知られていました。雪江はこのとき18歳。若さに似合わぬ技巧的な漢詩です。雪江は文久2(1862)年、35歳のときには墨僊の顕彰碑「退筆塚」に揮毫しています。

「西杖日記」に寄せられた書画は、城下町において身分や藩領を越えて文化の交流が育まれたことを雄弁に物語ってくれます。

この作品は8月下旬まで展示室3に展示しています。また、夏休みファミリーミュージアムのテーマ展「書の達人―土浦藩士関家の人々―」で、雪江ほか関家歴代の書を展示しますので、ぜひご覧ください。

岡市立博物館 (☎824・2928)